

ラジオ放送
＜平成27年10月～12月放送分＞

ON AIR



金光教の声

No.413

もくじ ~ contents

<信心ライブ>

☞ 金光教の集会で行われた発表や講話などを紹介します。

- 第1回 この手で育てられたんだね *page 1*
- 第2回 母の肉うどん *page 5*
- 第3回 祈りから生まれる世界 *page 9*
- 第4回 合格祈願 *page 13*

<先生のおはなし>

☞ 金光教の先生のお話です。

- 先生への手紙
大阪府・鳳教会 工藤由岐子 *page 17*

<信者さんのおはなし>

☞ 信徒の体験談です。

- 神様は見放さない *page 22*
- 山あり谷ありの人生 *page 26*
- 神様を使っていいんですか？ *page 31*
- いのちの躍動が聞こえる *page 35*
- 難あってありがたし *page 39*
- 神様に導かれての人生 *page 43*
- 大きな祈りと願いの中で *page 47*
- お母さんの言葉 *page 52*

《信心ライブ》第一回

「この手で育てられたんだね」

金光教の集会で行われた発表や講話などを録音で紹介する「信心ライブ」。

平成二十五年七月、名古屋市で信奉者の喜びを語る集会が行われ、金光教古渡教会の森清司

さんがお話をされました。

森さんはお母様と奥様の三人暮らし。お母様は前の年の暮れに転んで足を骨折し、四カ月も入院されました。退院後には、何かにつけて、人の手を借りなければならなくなり、お母様は、その度に、「すみません、すみません」と言われていました。森さんも奥様も、少し介護に疲れ始めてきた時、森さんは大きなことに気が付

きました。さて、どんなことでしょうか。

ある時、母の爪が随分伸びていることに気が付いて、爪切りも自分で出来ないのですね。病院にいる間は看護師さんがやって下さっていたのですが、退院してからは、爪を切るのが私の仕事になりました。

気が付くと、爪を切ってあげるわけがありません。爪をパチパチと切りながら、母の爪を眺めていますと、自分の手とよく似ているんですね。指の形とか、爪の形とか。そういうのを見ておりますと、こういう手に私は育ててもらったんだなあと、その手をまじまじと見ながら、母のお世話になってきたことを、その時、やっと実感しました。

色々やって頂いたことに対して、私は爪を切るくらいのことしか恩返しが出来ていないんだなあ、その時に気が付いて、今まで何かあると、「すいません、すいません」と私のこと

を呼びつけていましたけれども、自分から母を支える、母のお役に立つことを進んでやっていなかったなあと気付きました。

何かやっぱり心の中に、「やってあげている」とか、「面倒くさいが仕方ない」とか、そういう思いが少しあったのではないかなあと、その時にやっと反省を致しまして、これは自分から気が付いて、母の喜ぶことをしてあげようと、そういう気持ちにやっとなってきました。

そうしましたら、母も爪を切る度に、「ああ綺麗になった、ありがとうね」ということで、

「ありがとう」という言葉にだんだんと変わってきました。今は、爪切りをしてもらう度に本当にうれしそうにして下さるわけでありませぬれども。

私も爪切りばかりに気持ち向きまして、最近ネイルサロンのように色々磨いたり、ピカピカにしたり、ちよっと調子に乗っているようなことなんでしょうが、そういうことをしながら、やっぱり自分が気持ちよく相手のお世話をしておると、して頂いた方も、「ありがとう」と、快く私の思いを受け止めてくれる、そういうことなんだなあ、そこで改めて自分のあり方を見直したわけであります。

母はずいぶん背が小さくて身長が百三十八センチしかないんですね。私は百六十八センチほ

どありますので、三十センチぐらい身長が違います。

現在も母はちょっと姿勢もすぐ悪くなりますので、百三十八センチどころか、百三十センチぐらいのところ、ちょっと油断すると、すぐ腰を曲げて歩くものですから、「背を伸ばして」とか、「姿勢を正しく」と言いながら、母の歩く運動のお手伝いをしようと思って、一緒に歩くわけでありませうけれども、最近、ずっと母がですね、手を出さずですね。一人で杖を持って歩くんでありますけれども、やっぱり転んではいけないからスツと手を出さずです。私もスツと手を出して、母と手をつないで家の前を二人でテクテク、テクテクと歩いているんですね。何ともいえないような雰囲気なんですけれど

も、近所の人もそういう姿を見てですね、「あなたたちは仲がいいね」と、そういうふうに見守って下さると思いますし、近所の人が、「しばらくお母さん見なかったけれど。ああ、けがをしていたんですね。お大事に」ということで、外で運動をしておりますと、近所の方々が声を掛けて下さる。それで母もやる気を出しまして、「今日は誰に会うかなあ」と思いながら、外を歩くというようなことをしております。

母と手をつないで歩くなんてのを四十歳を過ぎてやりまして、何か恥ずかしい思いもするのではありませんが、そういう姿を見て、家内が言うように、「あなたたちは仲がいいねえ」という姿になって、「ああ、これが私も信心をしているからこそ、これまでの間違いを正して、親に

孝行の出来る自分の思いにならせてもらってき
たかなあ」と、そのように感じさせて頂いてい
るのであります。

母もこれまで、「すみません、すみません」
と言ってきたことが自然と、「ありがとう」と
という言葉に変わっていききました。そうすると、
言う方も自然と顔がにこやかになりますし、「あ
りがとう」と言ってもらった僕の心もですね、
ほんとに温かくなりました。「感謝してくれる
人のためにはもっと頑張らないといけないな
あ」という気持ちになって、最近はそのために、
二人で過ごしている時間の中では料理をしたり
とかですね、お掃除をしたりということも積極
的に取り組むようになりました。

そして母がいつも、「ありがとう」と言って

くれるその言葉が神心として私の心に届いて、
その喜びが私をまた成長させて下さるんだなあ
とありがたく感じています。

介護する人される人。お互いにつらい時もある
りますね。でも、そんな時、「ああ、この手で
育てられてきたんだ」と思う、それだけで優
しい気持ちになれるかもしれません。少し、心
の向きを変えて
みませんか。そ
こにありがたい
ものが生まれて
くると思います。
頑張ってください
ね。



《信心ライブ》第二回

「母の肉うどん」

金光教の集会で行われた発表や講話などを録

音で紹介する「信心ライブ」。

今日は、大阪府にお住まいの的場倫子さんが、平成二十五年十月に、金光教本部でお話されたものをお聞き頂きます。

私は今、大阪の堺にあります、上野芝教会で日々ご用にお使い頂いています。子どもたちは、上から高校二年生、二番目が小学六年生、三番目が小学五年生、一番下は三歳と、実にバラエティー豊かな子育てを楽しんでおります。家中は毎日とってもにぎやかです。

つい先日も、一番下の子が外で遊んでいたんですけども、「ズボンがぬれたあ」と言うて上がってきました。パツと見ると、ズボンの前の部分が、いい感じでぬれてました。

「オシッコ、出たんやね」と言うて、「ちがうちがう。水風船がオシッコしてん」と言うんです。「ぼくじゃないよ。水風船が、ここでパシャンて、オシッコしてん」。私も、「ああ、そうかそうか。水風船で遊んでたんやな」と思っつて、「じゃ、そのうち乾くわ」と言うたら、「うん」と言っつて、また外に遊びに行きました。その後、三男が帰ってきました、お友達も二人ほど来てまして、一緒に遊んでもらってたんですけども、お兄ちゃんたちが、「なんか、オシッコ臭くない?」「なんか臭いよなあ」っ

ていう話をしているのを聞いて、その一番下の

子が、そおーっと自分のタンスのところ、パ
ンツとズボンを取りに行きまして、部屋の隅っ
こに隠れて静かあに着替えておりました。それ
を見て私は、「ほれ、やっぱりオシッコぬらし
てんじゃん」って思ったんですけれども、言い
訳がすごく可愛くて、「水風船がオシッコした」
なんて言うもんですから、「まあ、いつか」と
思ったことでした。

私は、福岡県の水田教会という教会で生まれ
育ちました。兄が三人いまして、私は、末っ子
の女の子として生まれました。私の母は一人娘
の私には、どこに行っても苦労しなくていいよ
うに、また、家事で苦労することのないように
と、たくさん祈りを掛けて、色んなことを教え

てくれました。

料理とか裁縫とかお掃除とか、もちろん、そ
ういうことは、当然教えてもらったんですけれ
ども、一番私の中に残っているのは、毎日こつ
こつと一生懸命家事をする母の姿でした。毎日
毎日のはたきを掛けて掃除機を掛けて、また雑巾
掛けをして、たくさん洗濯物と、またみんな
のご飯、それから後片付け。毎日毎日その繰り
返しです。

でもその繰り返しを、当たり前に、毎日丁寧
にする、そんな母の姿を見て育った私は、毎日
せつせと家事をします。これは、母の祈りだと
思います。「一人娘である私が、どうぞ苦労し
ませんように」。そういう思いで、たくさん神
様にお祈りしてくれて、神様も、「よしよし、

分かった」と言って聞き届けて下さったんだろ
うなあ、と思わせて頂いています。そして私は
今、料理をしたり、掃除をしたり、お裁縫をし
たり、また、お菓子を作ったりと、楽しい毎日
を過ごさせて頂いています。

私は子どもの頃、肉うどんが大好きでした。

我が家では、年に一度、自分の誕生日には自分
の好きなおかずをリクエスト出来るというルー
ルがありました、まあ、裕福ではなかったので、
誕生日のプレゼントとかケーキとかはなかった
んですけれども、親心でしょうか、「せめて何
かおいしいものを食べさせたい」。そういう思
いでしてくれてたんだと思います。

うどんといっても、スープーとかで見掛ける
袋に入った、三十円ぐらいのあれです。下手す

ると、十八円とかで売ってますよね。あれなん
ですけど、まあ、私は毎年毎年肉うどんをリク
エストしました。兄たちは、「おいおい、もう
ちよっと減多に食べれんものにしてくれよ」と
言ってたんですけれども、まあ、そういう兄た
ちも、そろいもそろって「カツカレー」と言っ
てました。

その肉うどんは、いりこだしのスープで、麵
はクタクタです。お肉も、牛肉は高いので、豚
肉を甘辛く炊いたものです。畑からネギを取っ
てきまして、たくさん切って乗せて頂きます。
これがもう、とにかくおいしいんです。

友達は、誕生日というと、「あれ買ってもら
った」「これ買ってもらった」、また「どこそ
こに食べに行く」。お誕生会をする子もいまし

たね。もう、可愛いお人形とかおもちゃとか、うらやましくして仕方ありません。でもそんなこと、親には言えません。親も分かっています。最新のおもちやを持って、「これ、買ってもらったあ」って、遊びに来るんですからね。つかったと思います。買ってあげたいけど、買ってあげられない。でも、そういう思いを全て祈りに変えて、あの肉うどんを作ってくれてたんだろうな、今ではそう思います。

大人になってからは、もちろん、自分でも作りますし、お店で食べたこともあります。けど、やっぱり無理ですよね。祈りのスパイスがたっぷり入った、おいしいおいしい肉うどんは、母の以外食べたことはありません。

お母さんの深い祈りの中で育てられた的場倫子さん。今度は、子どもたちに、たっぷりの愛情を注いでいます。その姿を、神様も、にこにこ見守っておられることでしょう。



「祈りから生まれる世界」

金光教の集会で行われた発表や講話などを録音で紹介する「信心ライブ」。

今日は、平成十六年四月に、岡山県にある金光教本部で行われた「朝の集会」で、金光教高蔵教会の田中竜彦さんがお話されたものをお聞き頂きます。

ある先生が、実際に経験されたことをお話し下さって、私も取り組んでみたということをつお聞き頂きたいと思います。

電車の中での一コマでありますけれども、四人掛けのボックス席にご婦人が四人座って何や

ら話をしておられたそうです。そのちょっと離れた所に、その先生が座っておられた。そのうちに一人のご婦人がお嫁さんの悪口を言い出しますのでね。

そうしますと、ああいう話というのは、どんな広がっていくのか、それぞれに、おられたご婦人がお嫁さんの悪口を言い出したそうです。まさに鬼の形相で、「うちの嫁はねえ…」と、こういうふうに、やりだしたそうです。

で、その姿を見て、その先生は、「どうか、この人たちの心が助かるように」と、その場でご祈念をされたそうです。しばらくご祈念をしておられると、その中のご婦人の一人が、お嫁さんの良いところを言い出した。そうしますと、他の方々も次々にお嫁さんの良いところを言い

出して、次第に嫁自慢になっていったというんですね。

そういう話を聞かせて頂いて、しばらく経った時にですね、私は自分が検査のために、病院へ行かせて頂きました。その病院で、三人の婦人が長椅子に掛けて、何やら話をしておる。私は検査結果待ちで、ちよつと離れたところに座っておったんですが、黙って聞いておりましたら、看護師さんの悪口を言い出すんですね。自分の担当をしている看護師さんを…。

「私の看護師は注射が下手だ」とかですね、「私の看護婦は、口がきつい」とかですね、そういうことを言い出した。そんなことをずうっとしばらくやっておりました。

その時に、ふと、前の話を思い出して、「あ

っ、前に先生に聞かせて頂いた電車の中の話と、シチュエーションが一緒だなあ」と思いましたので、私も、真似ではありませんけれども、「せっかく病院に来て体を治して頂くのに、心の病気を持って帰っては気の毒だなあ」と思いました。その場でしばらく、「心が助かりますように」と、「お世話になつとる気持ちが生まれてくるように」というふうにご祈念させて頂いておりましたら、同じように、自分でもびっくりしましたけれども、一人の方が、「いや、私の看護師はね、苦しい時に声を掛けてくれたよ」と、こういうことを言い出すんですね。そうすると、また次の人が、「私の看護師はね、大したことはないけれど、血圧測るのは上手だよ」とかですね、そういうふうには、自分の担当の看

護師さんのいいところを語り出し合った。

「ああ、こういうことが生まれてくるんだなあ」と、私自身、それを通して、感じさせて頂きました。

私たち人間は、神心を頂いて生まれてきておられますけれども、教祖様が、心の鬼ということをおっしゃっておられますね。神心という良い心をもっておるんですけれども、心の鬼と言われる、良くない心も持ち合わせているんじゃないかなあと、こういうふうに思います。

そして、これも以前聞いた話なんです、良い心と悪い心があって、例えば悪い心になっていく時には、悪い心が百で良い心がゼロではない。悪い心が五十一で、良い心が四十九。ですから、ほんとにわずかの差。その差を行ったり

来たりしとるのが、私たち人間なんだと。

ですから、そのわずかの差のところにですね、「祈り」という光を当ててあげれば、わずかな差ですから、四十九と五十一が逆転をする。良い心の方に逆転をする。心の鬼が影を潜めて、神心が上回って今の看護師さんや、列車の中で出来事を例えれば、悪い心が影を潜めて神心になって、褒め合いになっていったというように思わせて頂きます。

まさに、そこにおられた方々の中に、神様が現れて下さったのではないかなあ、と思います。ささやかなことではありませんけれども、こんなことはと思わずに、人知れず、ささやかでも祈らせて頂くことによって、その時、その場に神様が生まれて下さる。教祖様が、「生

神とは、ここに神が生まれるということ、皆も同じようにおかげを受けることが出来る」というふうに残して下さっていますが、まさにその通りではないかなあというふうに思います。

なるのではないのでしょうか。

いかがでしたか。電車の中や病院の待合室で、たまたま居合わせた人のことを祈る。誰にも気付かれない、目に見えない、ささやかな行いですが、何か温かくて、確かな、祈りの力を感じます。

他人のことなんて関係ない。そんな風潮もありますが、見ず知らずの人のことでも、祈りを込める。そんな人が、一人、二人と増えていけば、この世の中はもっと温かく、優しい世界に



「合格祈願」

金光教の集会で行われた発表や講話などを録音で紹介する「信心ライブ」。

今日は、平成二十六年五月に、金光教新宿教会の岸井茂先生が、都内の教会でお話しされた講話の一部をお聞き頂きます。

まもなく受験シーズンがやってきます。今日のお話は、受験の前日、教会へ合格祈願に訪れた中学生のお話です。

「明日試験なので合格出来るようにお願いします」と言う子が来ました。おじいさんに連れられて来られました。高校受験だったんですが、

「明日受けるんですね。もし一年後に試験を受けるんだったら具体的に一つひとつおかげを受けていることを神様にお礼申し上げることから始めます」ということを言いました。

どういふことかというのと、「勉強が出来るということと自分がありがたいことです。そして、先生がいたり、色んなものが使えたりすることが素晴らしいと分かると、本当に嫌いな科目も含めてですが、勉強させて頂けることが、勉強してやるとか、しなくちゃならないということではなくて、『ありがとう』という思いで勉強に取り組めます。本当に『ありがとう』と感謝が出来ると、得意科目が出来るだけではなく、不得意科目が出来るようになります」という話をしました。

すると彼は聞いていて、納得した顔をしました。どうしてか。「それが本当だな」って分かったんですね。で、「その話を今は出来ないんだけど、緊急非常時にもお願いすることは出来ます。心して出来ますか？」と聞くと、「はい」と言ったので、「まず、最初にあなたは今

おじいさんと一緒にお参りに来ています。君は一人で受験していません。お父さんやお母さんも兄弟も、みんなあなたが受かって欲しいと祈りを掛けてくれている。思われているっていうことです。そして私もその仲間に入ります。あなたは一人で受けているのではなくて、多くの人たちから思いを寄せられている。そして、その背後には、神様の願いや思いがある。だから、そのことにまず、『ありがとう』を言わなければ

ばだめです。本当に一人で、『ああ、やるんだ』じゃないということ。それが分かったら、『ありがとう』とお礼が言えるでしょうし、本気で言わなければいけません」ということを言いました。

そして、「人は、放っておいたら大人になれません。愛されてないと、お世話を受けないと赤ちゃんは死にます。他の動物と違って、本当にお世話を頂かないと成長出来ません。だから今あなたがそこにいるということは、ずっと愛されてきたということを、心の底から感じて、ありがとうと言わなければいけません」と言いました。

で、試験の本番どうするか。まず、「神様これから、試験を受けさせて頂きます」と心の中

でちゃんと祈る。「どうぞ問題の見間違いのないように、精いっぱい出来ますように」と祈る。そして、「始め」と言われたら、「始めます」と言って受験番号をちゃんと写して名前を書かせてもらって、問題を先に見させてもらいます。

「全部見て、これが解けそうだな」ところからやるんだよ。これは方法を言ってるんじゃないんだよ。そう聞こえるかもしれないけど、『神様どうぞさせて下さい。こういう風にやります。私はちゃんと一つずつやります。どうぞ神様ついていて下さい』と、これが神様にお願いしながらするということだよ」と言うと、少し分かった様子でした。

それで、「今日これから帰ったら、あなたが一番いいと思うことをしてもいいですよ。試験

の問題を読み返してもいいし、頭を楽にするために寝てもいいし、何をしてもいいけど、一つだけしてはいけないことがあります。何かという、朝までお祈りしてはいけません」と言うのと、「どうして」って顔をしていました。

「それは本当にお祈りをしていることにならないから。嘘をついているのと同じだから」と言いました。「『何時間も神様にお祈りしてま』と言って勉強しなかったら、嘘をついているのと同じだとすぐ分かるでしょ」と。でも、もし神様ということまで心を向けるなら、夜眠れなくても、「横にならせて下さってありがとうございませう」。朝が来たら一睡も出来なくなつて、横にならせてもらうだけでも、「ありがとうございませう」と言うこと。そして、「本当にあり

がとうと思つて、本当にみんなの祈りを受けて、
させてもらうという風になった時、ベストを尽
くして神様がお立ち現れになるということ
です。神様と響き合うということです」とい
うことを言いました。

彼は合格しました。そして先生は、この後も
彼の立ち行きを願ひ続けています。

「何とか合格したい」という気持ちで受験の
前日、「困つた時の神頼み」に來た中学生でし
たが、「困つた」と思つている自分が既に、祈
られている存在であり、多くのものにお世話に
なつているのだという、先生の言葉で目が覚め
たのです。そして、感謝の心で全力を出し切つ
て合格しました。

これは受験だけのことではありません。感謝
の心に目覚めて、一つひとつ神様にお願ひしな
がらさせて頂くことの大切さと、多くの人や、
神様に願われ、祈られての自分であることを知
つて頂きたいと思ひます。

受験生の皆さん、合格をお祈りしています。



《先生のおはなし》

「先生への手紙」

大阪府・鳳教会 工藤由岐子

人生には色々な出会いがあります。今日はちよつと恥ずかしいのですが、私の子どもの頃の話をお願いします。

もう三十五年以上も前のことですが、私の心を変えて下さった担任の先生がいました。その方は、木村吉男先生といまして、私が小学校五年生の時、三十六歳の先生でした。その先生との出会いが、現在の私につながっているような気がします。

小学校四年生までの私は、極度の人見知りでした。兄弟がいなくて、しゃべることが出来た

のは、両親と近所の友達一人だけでした。学校という集団の場が怖かったのか、朝、ランドセルを背負って家を出、学校が見えた途端、緊張が走って体がこわばるのです。

教室に着いても、誰ともしゃべれません。いつも一人で座っていました。私に話し掛けてくる人もいませんでした。たまに、いじわるな男子が、私に向かって、「おい、お前は何でしゃべらへんのや、口があるのに」と、からかってくることはありません。

一番イヤだったのが、給食の時間でした。緊張しているのを通りにくかったので、食べるスピードが遅く、先生も困っていたと思います。一生懸命食べていたのですが、つらい時間でした。どんな場面でも私は、苦しいとかつらいと

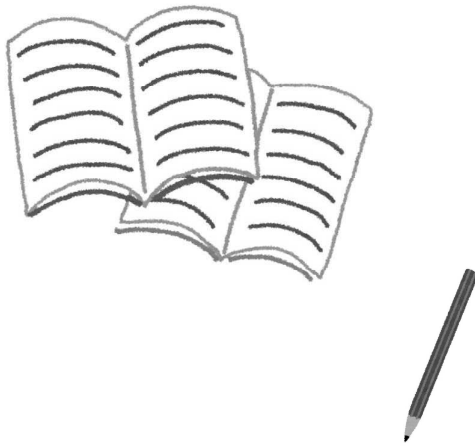
か、そういう感情を言葉にも顔にも出せませんでした。

新学期になると毎年、受け持ちの先生の家庭訪問がありますが、いつも私のそういったところが問題になっていました。親はとても心配だったと思います。

私は家の中では力が抜けて、おしゃべりをし、ご飯もおいしく頂いていました。けれど自分からは、学校の話をしなかつたと思います。母はいつも様子を聞いてくれましたが、どう返事をしていたのか、あまり覚えていません。両親は一人娘の私のことを心配し、毎日、神様に祈ってくれていました。

「どうか、娘の心が開いて、素直に思っていることを表現出来ますように」と。

月日が経ち、私は五年生になりました。そこで木村先生という、私にとれば運命の方と出会いました。先生は穏やかな人でしたが、授業で冗談も言われる、明るい先生でした。先生は新学期、クラスの人全員に、ノートを一冊用意するよう言われました。



そのタイトルは「先生への手紙」でした。授業のことも友達のことでも、自由に書いて下さいと言われました。宿題ではなく書きたい時に書いて、先生の机の上に出しておけば、お返事を頂けるのだそうです。「思ったこと感じたこと、何でもいいので」と聞いた時、何か私の心が動きました。私は先生とも全然おしゃべりが出来ないけど、書くだけなら先生の顔を見なくていいし、気持ちが楽かもと思いました。

最初に何を書いたのか覚えていません。ただ先生がいつも、私が書いた文と同じ位の長さで、丁寧にお返事を下さったことが、子ども心にも胸を打つものがありました。何度か先生と、やり取りをするうち、だんだん私の心が開き、大きな変化が起きてきました。

一学期のプール開きを前にした、そんなある日のことです。私はついに、先生にこんなお願いをしたのです。その当時の記録がありますので読みます。

「先生へ。お願いがあります。つらいことがあります。私は五年生なのに泳げないのです。私だけかもしれません。みんなスイスイ泳いで先が上がってるのに、私だけが一人で中で歩いていきます。そんな時、情けなさや悔しさで悲しくて泣きそうになります。だから先生お願いします。プールの時間に教えて頂けないでしょうか。まず、顔をつける基本練習からお願いします」と、書きました。

すると先生から、こう返事がきました。「分かりました。先生も頑張ってみましょう。きつ

と泳げるようになりますよ。他人に出来ることが自分に出来ないはずがないと信じて下さい。

先生は今、黒く日焼けしたうれしそうに笑っているあなたの姿、顔を思い浮かべています。頑張りましょう！」。先生のお返事を読んで、飛び上がる程うれしかったです！

数日経ったある放課後、私と一緒にプールに入って下さり、レッスンが始まりました。私の難関は、伏し浮きでした。水が怖くて体を横たえるということが、なかなか出来なかったのです。

そんな私に、先生は力強く言って下さいました。「だいじょうぶ！ 先生が見てるから！ 神様も一緒だよ！」。

先生の言葉に導かれて、私は顔をつけて、ガ

ッ！ と前に行きました。あつ浮いた！ あれ？ 怖くない……。気持ちがいいと思った瞬間、先生の大きな声が聞こえました。「そうそう、そのまま、足をバタバタする！」。

私は言われるまま、しました。夢中で手も動かしました。息が苦しくなるところで立つと、五、六メートル進んでいました。初めて泳いだ時の感覚：今でも忘れられません。

不思議だったのは先生が、「神様も一緒だよ！」と言われたことです。親からはよく聞いていましたが、なぜ先生が言うんだろうと、後になり思っていました。もしかしたら、「先生への手紙」の中で、私の家が金光教の教会であることを話していましたので、その言葉を使われたのかもしれませんが。

私はこの日を境に、緊張がとけ、自然と笑えるようになりました。友達も出来ました。ほんとうにうれしかったです。私がここまで頑張れたのは、陰で私を心配し、ずっと祈ってくれていた両親の影響もあつたんだと、今では思っています。

「先生への手紙」の中で、私はまず、素直な気持ちを表すきっかけを頂きました。そして最初の夢が叶いました！

神様が私を助けようと、木村先生を連れて来て下さったのかもしれない。



《信者さんのおはなし》

「神様は見放さない」

香川県坂出市に住む金光美子さんは、五十歳の時に、通信制の高校に入学しました。美子さんにとって、その入学は、生きる意味を必死に探る、命のものがきとも言えるものでした。

美子さんには、のぞみさんという中学二年生の娘がいました。勉強もスポーツもよく出来、学校でも人気者でした。親思いの素直な子で、学校での作文に、「わたしの宝物は命です。なぜなら、父や母が一生懸命育ててくれた命だからです」と書いていました。その命が、作文を書いた数日後、交通事故で突然失われたのです。

お葬式が終わった時、美子さんは、生きる気

力をすっかり失って、家から一步も外へ出られなくなっていました。ずっと娘の霊前に座り込み、泣きながら名前を呼び続けました。

美子さんはそれまでの数年間、金光教の教会に毎日お参りしていて、娘がすすくと成長していくのも、神様のおかげと感謝していました。それだけになおさら、娘の死はどうしても受け入れることが出来なかったのです。

自宅の神棚に物をぶつけながら、「どうしてのぞみを連れて行った！ 殺すなら私を殺せ！」と叫びました。教会への参拝もぷつぷつと途絶えてしまいました。

そんな美子さんを、中学校の校長先生は何度も訪ねて来られました。そして、「のぞみさんが他の子たちと一緒に卒業出来るように、出来

るだけのことをします」と言われたのです。

「新学年を迎えると、亡くなったのぞみさんは、校長先生の配慮で、三年生のクラスに組み入れられました。体育祭、文化祭など、学校の行事があるたびに、校長先生はのぞみさんの写真を迎えに来られ、修学旅行中も、写真を片時も離さず胸に抱いて下さっていました。またクラスの担任の先生も、命日には子どもたちと一緒に、家を訪ねて下さるのです。

娘の魂は今も多くの人たちと共に生き続けている。その確信が、美子さんを力付けていきました。そして卒業式が近付いた頃のこと。

「娘は高校にも行きたかっただろう。その願いを叶えてやりたい。そうだ、私が……」

校長先生に相談すると、先生は大喜びで激励

して下さいました。こうして美子さんは、隣町の通信制高校に入学することになったのです。

通信制とはいっても、月に数回、登校日があります。家にずっと引きこもっていた美子さんも、この日ばかりは、娘の写真を身に付けて、学校に出掛けていくのでした。

通信制高校には、さまざまな事情や悩みを抱えた人たちが来ていました。中には、学校まで来ても、教室に入る勇気が出ない人もいます。勉強に意欲が持てず、せっかく入った高校をやめようとしている人もいました。

かつての美子さんなら、そういう人を見ると、意志が弱いとか、親の教育が悪いなどと批判的な思いを抱いたかもしれません。しかし、自分で自分が思い通りにならないこともあると知っ

た美子さんのまなざしはどこまでも温かく、「焦らなくていいのよ」と、優しい言葉を掛けるのでした。

いつしか美子さんは、若いクラスメートたちから、母親のように慕われる存在になっていました。担任の先生も、「金光さんのおかげで学校に来ることが出来ている生徒も多い」と、お礼を言われるほどでした。

部屋に閉じこもって何も出来なかった美子さんが、いつの間にか、みんなから頼られるまでになったのです。勉強にもやり甲斐を感じ、学校に行くのが待ち遠しいぐらいになっていきます。

これは美子さんにとって信じられない変化でした。よくぞここまで、と思ったその時、ハッ

と気付いたのです。

娘のためにと、自分の考えで高校に入ったつもりでいたけれど、すべて神様がお計らい下さったことではないだろうか。あの校長先生も、担任の先生も、娘のクラスメートたちも、みんな私を救うために神様が差し向けて下さっていた。そして今度は自分自身が、悩める若い人たちに向けて、神様に使って頂いているのではないだろうか。

美子さんは、教会にお参りしていた頃、「神様は人を使いとなさる」と教えられていたのを思い出していました。

さらに、こんなことにも思い至ったのです。

「私は神様ばかりを恨み続け、怒りをぶつけてきた。そのせいか、加害者を憎む気持ちが少

しも起こらずに済んだ。もし憎しみが人に向かっていたら、自分はどんな人間になっていたことか。神様が一人悪者になって、黙って泥を被って下さっていたおかげで、私の今の幸せがある」

神様の深いお詫らいと慈しみの中に生かされていることを思い、美子さんの胸の中に、熱いものが込み上げてくるのでした。美子さんは再び、教会に毎日参拝するようになりました。

のぞみさんが亡くなって十三年経った今も、美子さんの家には、のぞみさんのクラスメートだった人たちが、「おばさんに会うと元気をもたらえる」と言いながら訪ねて来ます。悩みを抱える若い人たちの相談相手になることもしばしばです。

「どんな時だって、神様が私たちを見放されることはないですよ。いろんな人たちを動かして、何とか助けてやろうとして下さっている。その神様のお心を知ってもらいたいなあと、いつも願いながら、話をしているんです」と、美子さんは語ります。

我が子を失った悲しみは、決して消えることではないでしょう。しかし、つらい体験を通してつかみ取った幸せを、さらに大きく広げていくことが、自分の命と共に、我が子の命を輝かせることにもなるのだと、美子さんは信じているのです。



《信者さんのおはなし》

「山あり谷ありの人生」

おはようございます。今朝は金光教のご信心をなさっている方の体験談をご紹介します。

その方は名古屋にお住まいの篠田康子さん、八十一歳です。篠田さんは、「信心なんて、誰がするものなんだろう、私には関係ないことだ」と長い間、思っていたそうです。そんな篠田さんでしたが、今は、「山あり、谷ありの人生だけれど、全てに深い神様の思し召しがあり、おかげがあると気付かされました」と言われます。どんな経緯でご信心と出合われ、どのように変わっていかれたのでしょうか。お話を伺いました。

篠田さんは二十五歳の時、お見合いをし、とても素敵な人に出会い、結婚を決めました。そして明日が結婚式、という日に、ご主人となる人に連れて行かれたのが、金光教牧野教会でした。

当時は、全くの無神論者だった篠田さんは、それはそれはびっくりしたそうです。背が高く、スポーツ万能で、見るからに頼もしそうな人と胸をときめかせて結婚を決めた彼が、畳に頭をすりつけて一心に神様に祈っている姿は、初めて見る彼の一面でした。

篠田さんと金光教の出合いはそんな風に始まりました。結婚した時、ご主人はサラリーマンでしたが、新婚間もない時に伊勢湾台風の直撃を受け、家や家財道具一切を失ったのを機会に

ご主人はすっぱりとサラリーマンを辞め、布団屋さんを始めました。

思い切った脱サラでしたが、当時の布団といえば大切な家財道具。しかも名古屋の嫁入り支度といえば、婚礼布団に百万円を掛ける人も多かったそうですから、先を見越しての転職でした。

篠田さんも店に出て一緒に働き、全くの素人で始めた商売でしたが、順調に進み出しました。

ところが、そんな頃に、二歳になった可愛い盛りの長女が交通事故で亡くなったのです。その悲しみとつらさは、今でも言葉に表せないほどですが、それから授かった男の子三人の子育てと商売に精を出し、落ち着いた日々を取り戻していきました。

その頃の信心はもっぱらご主人任せ。月に一度、宅祭といって、教会の先生が篠田さんの家に来て下さり、家の神様のお祭りを仕えて下さる時に一緒にお参りし、お話を聞く程度でした。しかし、子どもたちが順調に育ち、大学に進学するようになると、篠田さんはこの恵まれた境遇に感謝せずにはいられないような思いになり、「それが神様かしら」と思うようになっていきました。

そんな中で、大きな出来事が篠田さんを襲いました。年末も押し迫った大みそかの朝、ご主人が突然、脳梗塞こうそくで倒れ、その日のうちに亡くなってしまったのです。

その時ご主人はまだ六十歳。またしても最愛の家族を突然に失ってしまった篠田さんでした。

が、悲しみに浸っているわけにはいかず、後を
継いでくれた次男と商売を続けていきました。
ところが、世の中はバブルがはじけ、景気は悪
化。しかも生活様式は布団からベッドに、座布
団からソファにと様変わりし、布団屋さんにと
つては非常に厳しい状況に追い込まれていきま
した。篠田さんは次男一家のことを考えて、夜
も眠れない日が続きました。

更にそんな中で、三男が三十歳を目前に勤め
ていた会社を辞めて、「自分は医者になりたい、
医学部を目指したい」と言い出したのです。家
がこんな大変な時に何を夢のようなことを、と
いう思いと、この子の人生はこの子のもの。親
だからと言って無理にやめさせることは出来な
い…、篠田さんは苦しみました。

そんな中に、「神様をお願いしていけば、き
つと良いように導いて下さる」という、宅祭の
度に聞いていた先生のお話が、むくむくと篠田
さんの心によみがえり、「どうぞあの子に一番
良い道をお授け下さい」と祈りました。

それからの篠田さんは、家の宗教だからとか、
嫁としての務めといった義務感からではなく、
自分から進んで金光教の信心をしつかり学ぼう
と思いました。頼りにしていたご主人の代わり
を神様に求めたのかもしれない。そして、教
会に足を運び、教えの本を読むうちに、この信
心は人として生きるべき道を教えてもらえる確
かな信心だと確信するようになりました。

そんな中で三男は一浪した後、無事、医学部
に合格し、今は勤務医となつていきいきと働い

ていますが、篠田さんにとっては神様に心を向けることで、助かりの世界へと方向転換した大きな出来事となりました。



そして、お店のほうは、「お母さん、これ以上店はやっていけない」と言う次男の言葉に、

次男の就職もすんなり決まり、これも神様のおかげと思う中で、またまた大変なことが起こりました。いわゆる出世街道を歩んでいた四十代

の長男が出勤前に突然倒れ、そのまま亡くなったのです。

篠田さんの心には、「どうして」という思いが募りましたが、悲しみの中でも教会に参拝し、祈る中で、「短い一生だったかもしれないけれど、長男は本当に恵まれて暮らし、ずいぶん親孝行もしてくれた、なんと神様に可愛がって頂いてきたのだろう、幸せな一生だったのだ」と思えるようになっていきました。このように思えたことで篠田さんは前を向くことが出来たのです。

今、篠田さんは、ご自分の山あり谷ありの人生を振り返ります。「主人の脱サラもびっくりでしたが、お店を始めたおかげで、いつも一緒にいられて、とても幸せな結婚生活でした。神

様のお計らいには本当に深い意味があるのだと思えます。今は先のこととはみんな神様にお任せ。それはとても楽なことですよね」と篠田さんは言います。

何が起こつてきても、そこに光を見出し、先を楽しむ生き方、それは素敵な生き方だと思います。



《信者さんのおはなし》

「神様を使つていいんですか？」

萩焼きで知られ、錦帯橋や秋芳洞など観光資源が豊富な山口県。白坂広子さんが参拝する宇部東教会は、空の玄関口となる山口宇部空港がある宇部市にあります。

十八年間、訪問介護ヘルパーの仕事を続けている広子さんは六十七歳。三人の娘と息子たちは、それぞれ家庭を持ち、二人の孫がいます。定年を迎えたご主人に送り出され、ほぼ毎日、数軒の利用者さんのお宅を訪問し、はつらつと日々を過ごしています。広子さんの真心のこもった仕事ぶり、奮闘ぶりを知る周囲の人は、皆一様に感心し、「大変ね〜」「すごいね〜」と

口にします。広子さんは決まって、「いいえ」と首を振り、「大変じゃないんです、楽しいんです」と、目を輝かせながら笑顔で答えます。

訪問介護ヘルパーは、ケアマネージャーが作ったプランに沿って、介護を必要とされる方のお宅を訪問し、お世話をします。体を拭いたり、オムツ交換や入浴の介助など、体のお世話をする「身体介護」と言われる内容と、食事作りや買い物、掃除、洗濯など、家事をサポートする「生活援助」と言われる内容があり、利用者さんの希望もくみながら、状態に応じて必要な内容が決められます。

曜日ごとに複数のヘルパーが一人を受け持つので、日によって内容に違いがあつてはいけません。制度の上でも、決められている以外のこ

とは出来ないのですが、広子さんは、常に、あれもしてあげたい、これもしてあげたいという思いがあふれます。

ここ最近では、認知症の方をお世話することが増えてきました。体のお世話や生活のお世話だけではなく、心のケアも大切だと感じ、心を寄り添わせながら取り組んでいます。

広い敷地の大きな家に一人で暮らす九十代のおばあさんのお宅を訪問した時のことです。着くと、家の前にはパトカーが停まっています。家の窓ガラスが割れています。おばあさんと話をしている警察官は困り果てている様子でした。広子さんが近付いていくと、おばあさんは広子さんを見るなり、「あんだ、何でパトカー呼んだのよ」と、叱るように広子さんに言いました。

これはきつとおばあさんが自分でガラスを割ってしまい、自分でパトカーを呼んだものの、パニックになってしまったんだと察した広子さんは、「ごめんね、間違えちゃった」と、とつさに答え、おばあさんを落ち着かせました。そして警察官におばあさんの状態を説明してその場は納まりました。

おばあさんは、認知症の影響で、時折暴言を吐いたり、杖でテーブルを叩いたりすることがあり、訪問出来るヘルパーがなかなかいません。続かなくて辞めてしまう人がほとんどです。

広子さんは約六年間、神様にお願いしながらお宅を訪問し、お世話を続けました。おばあさんは段々と広子さんに信頼を寄せるようになり、「あれをして欲しい、これをして欲しい」

と自分から頼んだりしていました。特に入浴の介助は広子さんにだけ委ねていました。

ある日、広子さんは朝目が覚めると同時に、なぜかふとおばあさんの顔がまぶたに浮かびました。おばあさんは体調が優れず、しばらく病院に入院していました。入院して二週間後、おばあさんは亡くなりました。実は顔が思い浮かんだというその日はおばあさんが亡くなった日でした。そのことを知った広子さんは、おばあさんと心を通わせることが出来ていたのかなと、悲しい中にも穏やかなものを感じました。

広子さんの信心は、子どものころ、お母さんに連れられて教会にお参りしたことに始まりません。結婚して生まれ育った土地を離れても、教会参拝は続きました。広子さんの信心に理解を

示すご主人が、教会を探し、参拝を後押ししてくれました。子どもに問題が起きた時など、当然のように神様に向い、神様を信じておすがりしていくうちに、「神様にお願ひしたら大丈夫」という安心感を得ていきました。

ヘルパーの仕事をする時も、教会の先生が書いて下さった教えの言葉を常に携帯し、「何事も神様がさせて下さる」「神様がいつも一緒だから」という安心感に包まれて利用者さんとうき合っています。

オムツを交換することを嫌がる方に対して、「おしりにできものが出来ているから見せて」という言葉がとつさに口から出てオムツ交換が出来たことや、便が出なくて苦しんでいる方がいた時は、神様にお願ひしながらお世話をして

いると排便が出来た、という不思議なこともあり
りました。すべて神様が言わせて下さり、させ
て下さっていると感じています。

けれど時には、うまくいかないこともあり、
さらに神様をお願いします。お願いしてばかり
で、「こんなに神様を使ってもいいのかなあ？」
と、ちよっぴり心配になりながらも、広子さん
は一層祈りを深めています。

金光教の教えの中に、「信心するといっても、
みな神様を使うばかりで、神様に使われること
を知らない。神様は人を使いとなさる。神様に
使われることを楽しみに信心せよ」という教え
があります。

広子さん自身は、神様を使うばかりだと感じ
ているようですが、もうすでに神様は広子さん

を使って下さっていて、多くの助かりや喜びが
生まれているのだと、思えてなりません。

そして広子さんは、利用者さんから、「あり
がとう」「また来てね」と言ってもらえること
がうれしくて、元気をもらいます。

「神様がさせて下さる間は、この仕事を続け
たいです」。そう言って、ひときわ目を輝かせ
る広子さんは、喜びに満ち溢れているのです。



《信者さんのおはなし》

「いのちの躍動が聞こえる」

香川県の丸亀城。白鳥が遊ぶお堀から見上げると、そこには高さ六十メートルを超える石垣があります。積み上げられた石垣の高さは日本一と言われ、四百年の歴史を刻んでいます。お城の近くに、金光教丸亀西教会があります。今朝は教会の御子息である河口教昌さん、三十六歳のお話です。

お話を伺うために案内された部屋には、ピアノが置いてありました。そして棚にはDVDがたくさん並んでいます。その中で『河口教昌バリトンリサイタル』という文字が目にとまりました。彼は声楽家です。

東京芸術大学音楽学部を卒業した河口さんは現在、新居浜市民合唱団の指揮者であり、高松市の交響楽団のスタッフをしています。音楽の道に進むキッカケになったのは、幼いころからお姉さんの弾くピアノと歌を耳にしていたからだそうです。

河口さんが大学に入ったこのことです。慣れない東京での暮らしに足を運んでいたのが、金光教麻布教会でした。

そのころを振り返り、河口さんは言います。「忘れもしません。大学最初の講義でしたが、教授から、音楽の取り組み方について、非常に厳しく叱られたことがあります。その日は家に帰る気になれず、足が自然と教会の方に向かっただけです。神前にぬかずいた瞬間、涙が溢れ

てきまして、声を上げて泣いたことがあります
た」。

河口さんにとって教会は、どんな悩みも吸い
取ってくれる場所になりました。河口さんは、

「僕にとって神様は、光であり、慈しみとい
うか、優しく包んで下さるものです」と静かに話
されます。しかしその表情からは、日々、命と
向き合う河口さんの強さが見えます。

実は河口さんは生まれた時から腎臓の機能が
弱く、子どものころに、いずれは腎臓移植か人
工透析が必要になると、医師から言われていた
そうです。薬を飲みながら学校に通っていまし
たが、大学四年生の時に、いよいよ移植か透析
の選択を迫られることとなりました。透析を長
年続けていくと、体に負担が掛かるからと移植

を進められていたそうですが、ドナーが見付か
らず、結局河口さんのお父さんが検査の結果、
ドナーとして適合することが分かったのだし
た。

当時を振り返り、河口さんは言います。「移
植をしたとしても、十年経つと、透析が必要に
なる可能性が高いということでした。ここで父
の腎臓を頂いたとしても、使い捨ててしまうよ
うな申し訳ない気持ちになりました、自然と透
析の道を選びました。もう十四年目で、透析の
回数は三千回位になります。透析は週三回で、
一回につき五時間して頂いています。遠い所か
ら来られる患者さんもいる中、私は偶然、病院
が家のそばで、徒歩二分という近さなんです。
実は今日も行ってきました」。

そう話す河口さんの声は少し出しにくそうな様子です。

人工透析では、腕の血管から血液を取り出して老廃物を除き、奇麗にして体内に戻します。

腕には透析しやすい処置がされていて、血流が生々しく感じられます。透析直後の左腕を、河口さんは、「どうぞ」と差し出して下さいました。そおっと腕に触れた瞬間、勢いよく流れる血流の振動が指先に伝わってきて、まるでザーザーと強い音が聞こえるようで、命の躍動が感じられます。

河口さんは、現在の心境について、こう話します。

「透析をして仕事に行くんですが、直後は階段を上るのもしんどくなります。でも透析をしな

いと命をつなげません。だけど、大変だとは思いません。むしろこのことで巡り会えた人たちもいます。

香川県と愛媛県の腎臓病患者の会の人から、お話を歌を歌って頂けませんかと言われました。去年させてもらいましたが、わざわざ来て下さった名古屋の大学教授が一番前に座っていて涙して下さったり、公演後に出口の所で、年配の方がずっと私の手を握って離されないうことがありました。人に勇気を与え、生きる意味を感じて頂けることがありましたら、それは神様が私に、これを一つの道として伝えなさい、と言って下さってるのかなと思うようになりました。

実を言うと、最初のリサイタルの時には、透

析のことを公表しませんでした。他人と違う体
であることを恥ずかしく感じていたんです。そ
れがある時、合唱団の方に言われました。『な
んで隠そうとするのか。個性なのに…。それぞ
れの人間のそれぞれの個性があるんじゃないで
すか』と言われた時、世界が開けた気がしまし
た」

河口さんはさらに続けて穏やかな表情で話し
ました。「現状を苦しめないでいられるのは、
金光教の存在があるからです。いつも神様が守
って下さっているように思っています。僕から音
楽を取れば、何も残りませんよ」

河口さんは最後に歌って下さいました。

力強い歌声を聴いた時、先程触れた河口さん
の腕を勢いよく流れる血液が、まるでオーケス

トラが奏でる音だったような錯覚を起こさせま
した。そこに生かそう生かそうとする神様の声
が聴こえてくるようでした。



《信者さんのおはなし》

「難あつてありがたし」

大分県の金光教白杵教会に参拝する森崎司さんは、御年七十五歳。六十年続けている洋服のリフォームの仕事は今も腕は確かで、精度の高い紳士服を丁寧に仕上げていきます。

森崎さんの一日は、毎朝教会に参拝し、今日も新たな命を頂いていること、健康であることを神様にお礼することから始まります。信心の切っ掛けになったのは二歳の時、小児まひになったことからだと仰いますが、実際にはその後、いくつかのご不幸を経験した後に、金光教に出合うことになります。

昭和十五年、森崎さんは八人兄弟の末っ子と

して、大分県の佐伯という町で生まれました。海と山に挟まれた半農半漁の町で、当時はリアス式の美しい海が広がっていたそうです。

そんな素晴らしい環境の中で、家族の愛情を一身に受け、元氣いっぱい保育ははずでしたが、二歳の時、突然高熱に襲われました。熱は二、三日経っても下がる気配がなく、お医者さんの診察を受けても風邪の処置を施されるだけで、一向に良くなりません。

心配になったお母さんは、遠く離れた病院で診てもらうことにしましたが、いくつかの病院を転々とするものの原因が不明。病名さえも分からないまま時が過ぎました。仕方なく自宅に帰って様子をみると、あれほど高かった熱も次第に下がりました。ところが、安心したの

もつかの間、異変が起きます。

「あら、この子、足が立たんわ」。布団の上で、必死で立とうする我が子を見たお母さんのシヨックは、並大抵のものではなかったでしょう。診断の結果は、小児まひで、左足がまひして足に力が入らなくなっていました。

その翌年、不幸なことにお母さんは子宮がんを患います。森崎さんが障害者として苦勞するであろうことを、誰よりもつらく思い、そのことに責任を感じていました。「司を頼む」と家族に言い残して、お母さんは亡くなりました。不幸は続くもので、さらに数年後、お父さんも肝臓がんで亡くなってしまいました。

自分の病気が両親に心配を与え、その上、両親を亡くしながら、自らは命を失うことなく生

かされている。このことに深い意味があるとは、まだ子どもの森崎さんには知る由もありません。後に、一生死なない親ともいえる「天地の親神様」に出会うことになるまでは…。

十五歳になった時、森崎さんは家庭の事情から就職をすることになり、洋服店で見習いとして働くことにしました。技術を身に付ける仕事の方が将来、社会的な自立がしやすいと考えたからです。当時の洋服店は、親方の指導の下、住み込みで修行をするという形が普通でした。そして、たまたまその店の経営者ご夫婦が金光教の信者さんだったことで、森崎さんの心に一条の光が差し込みます。それは教会に導かれ、祈り、祈られての生活の始まりでした。

洋服店のご夫婦はとても優しい方で、いくら

失敗や間違いをしても許してくれたそうです。見習いとして七年間修行し、職人として数年間働いた後、お店の向かいにある婦人服店に勤務していた女性と結婚。そして、いよいよ一人前の職人として独立、注文服の洋装店を開業することになりました。

ところが、昭和四十年代から大量生産される安価な既製服が大半を占めるようになり、注文服の需要は年々減少していきます。やがて仕事の注文も無くなり、子育ての時期とも重なって生活が苦しくなりました。やむを得ず、生活保護の手続きを市に提出することを考えた森崎さんは、そのことを教会の先生に相談したのです。しかし、先生から、「三度の食事が食べられたらありがたいと思って、もう少し辛抱してみ

なさい」と励まされ、手続きを少し待ってみることにしました。すると、ちょうどそのころ、市内にオープンしたデパートの洋服担当者から、「ズボンの裾上げなどしてもらえませんか」と、仕事の依頼があつたのです。まさに、渡りに船とはこのことで、その後の生活が安定していきます。

それからの森崎さんは、毎朝、欠かさず教会に参拝するようになりました。教会では、お話を聴き、教えに基づいて、家業をおろそかにしないよう心掛けます。「家業は信心の行、家業をありがたく勤めれば、ありがたいおかげが受けられる」という教えは、現在も職場の前に掲げて座右の銘にしているそうです。

仕事に掛かる前には、「どうぞ間違いのない

ように」とご祈念し、仕事が終わるとミシンなどの仕事道具や、針に糸を通すのに必要不可欠な眼鏡に対しても、お礼を申し上げるといいます。森崎さんは、「信心させて頂いていると、物に対しても人に対しても、お礼の心が湧いてくるのがありがたいことです」と言いますが、その言葉が、自然に心に響きます。

森崎さんは続けます。「障害があつたとしても、色んな人が助けてくれたおかげで、それを苦にすることもなく、今の幸せな毎日を過ごすことが出来ています」。

金光教には「難はみかげ」という言葉があります。障害を持ちながらも多くの人に支えられ生かされている。その働きに気付かされたことが有り難く、そのことがおかげにつながって

いくということを真実として実感されています。

「私が現に助けられ、助かりの証拠があるものですから、生きている間に一人でも二人でも信心を勧めたい。そして、どうしても信心して助かってもらいたい」。

これが今も持ち続けている、森崎さんの強い願いです。



《信者さんのおはなし》

「神様に導かれての人生」

山口県の南西部、瀬戸内海に面した山陽小野田市。水平線に沈む夕日が美しく、「日本の夕陽百選」に選ばれている奇麗な海岸がある一方、瀬戸内工業地域の一角として、明治のころから工業都市として栄えてきた町です。

この町で生まれ育った天満広志さんは、今年五十四歳。奇麗な夕陽の見える海岸からほど近い金光教小野田市教会に参拝しています。

今から百年ほど前のこと、広志さんのひいおばあさんが、生活の苦しきから、子どもを連れて自殺しようとさまよい歩いている時に、見ず知らずの女性に声を掛けられ、金光教の教えに

触れたことがきっかけとなって、天満家の信心が始まりました。

広志さんも子どものころから、お母さんに連れられてお参りを続けており、今では、奥様と三人の息子さんも、そろって教会にお参りしています。

広志さんは、「もしも、ひいおばあさんが、あの時、その女性に出会わず、金光教の教えに触れていなければ、今の天満家はありません。その後においても、じつは私自身、この世に生まれなかったかもしれないです」と話します。

それは、広志さんのお母さんが、広志さんを身ごもった時のことです。複雑な事情から、お母さんは、この子は産むまいと考えたそうです。が、教会の先生から、「せつかく授かった命。

産ませてもらいなさい」と説得され、出産した経緯があるのです。

その後、未熟児で生まれた広志さんは、子どもこのころから体が弱く、家族を始め、教会の先生の祈りに支えられ育っていきました。

高校卒業後は、神奈川県にある化学工場に就職しましたが、入社後、数年してから、大きな手術を受けることになりました。

会社では、社員の健康増進を図るために、毎年、職場対抗の駅伝大会が開かれており、若手社員は、仕事そっちのけで、昼休みも駅伝の練習として、工場の中を走らされるのです。同期の中でも足の遅かった広志さんは、その練習が嫌でたまらなかつたのですが、それでも毎日、練習を重ねるうちに、次第に体力も付き、選手

に選ばれるまでになりました。

ただ、広志さんには、気掛かりなことが一つありました。それは、中学生のころから、左腰に出来ていたしこりが、徐々に痛み出してきていたことでした。

駅伝の練習が、厳しくなるに従い、痛みもひどくなり、二十四歳の時に、会社の診療所に相談したところ、東京の大病院を紹介されました。検査の結果、骨盤部分に腫瘍が出来ており、骨盤の骨の切除次第では、術後、車椅子生活になるかもしれないとの診断でした。

思いも寄らない大きな手術を受けることになり、その後の生活がどうなるのかと心配でたまらなくなりました。古里のお母さんや教会の先生の祈りの中で、手術は無事成功し、生活には

不自由しない程度の切除で済みました。そして、日頃の生活も、何ら変わることなく進めることが出来、手術の二年後には、改めて選手として駅伝大会に出場し、なんと区間賞まで取ることが出来たのでした。

その数年後のことです。広志さんは、地元に新しい化学工場が出来ることを聞き、神奈川の会社を退職して、山口に帰ることにしたのですが、その転職は、実に不思議なものでした。

一口に化学工場と言っても、その仕事内容は千差万別です。神奈川の工場で扱っているのは、全国にも数カ所しかないような特殊なものです。それが扱う工場が地元に来たのです。そして、普通なら他社からの転職は難しい中、ちようど教会のご信者さんの中に、その工場建設

に関わる方がおられ、その方の紹介で入社することが出来たのでした。

広志さん自身、ちようど地元に戻って、子どもたちのころのように教会にお参り出来る生活がしたいと願っていた時期でしたので、神様が導いて下さっていることを強く感じたのでした。

地元に戻った広志さんは、その後、結婚し、三人の子どもにも恵まれました。

順調な生活を送っていた広志さんですが、四十二歳の時、会社の人間関係で悩むことになり、気持ちが落ち込み、うつ状態に陥ってしまいました。会社に行こうとすると不安に襲われ、会社を休むようになりました。薬を飲んでも、気持ちは落ち着かず、でも教会に参拝すると、不思議と心が落ち着きました。

ある時、先生から、「あなたには、神様が付いて下さっているんだから、自信を持ってさせてもらわないといけないよ」と言われました。

その言葉で、何か、安心することが出来、家族の支えもあって、会社に復帰することが出来るようになったのです。

広志さんは、こう言います。「その時、その時には、分からなかったのですが、今、改めて人生を振り返ってみると、一つひとつの事柄に神様が段取りを付けて下さったと思えるのです」。

このように話す広志さんは、高校卒業後、神奈川の工場に就職しなければ、駅伝もしていなかったでしょうし、そうすれば、骨の腫瘍しゅようもそのままにしていたかもしれませぬ。東京の大き

な大学病院で手術してもらえたこともありがたいことでした。そして、手術が終わってから、地元に戻る事が出来、家庭を持つことも出来ました。心を病んだ経験が、今、職場の人たちへのサポートにも役立っているのです。

神様の大きいなる働きに導かれ、今日の命を生きている。その喜びをかみしめつつ、広志さんは今日も仕事に向かいます。



《信者さんのおはなし》

「大きな祈りと願いの中で」

名古屋駅から電車に揺られて約三十分。愛知

県知多半島の付け根に大府市があります。

ここにある金光教大府教会に毎朝お参りしてから入社する安達美智雄さんは、昭和二十九年生まれの六十一歳。若々しい笑顔に眼鏡の映える方です。世界に展開する自動車部品メーカーの会社の役員を務め、多い時は一年に十五回も海外に出張するハードスケジュールの中を、心も体も健康のおかげを頂いて毎日頑張っています。

「私は、会社に入ってから嫌な上司に一度も会ったことはありません。なぜだか分かりませ

んが、どの方も私を引き立ててくれました。今に思うと、全て神様のお導きであり、私を使つて下さっているんだと感じるんです」と、うれしそうに話します。

安達さんは、金光教の信心を熱心にする両親の元に三人姉弟の末っ子の長男として岡山県に生まれました。

大学生となり、お母さんから毎月送られてくる仕送りには必ず手紙が添えてありました。内容のほとんどは金光教の教えであり、特に体のことに関係する教えでした。安達さんは、子どものころから体が丈夫な方ではなかったからです。

「また金光教の話か…」

そんな気持ちでいつも手紙を読んでいた安達

さん。けれどもお母さんの手紙は、「困った時には、教会にお参りしたら必ずおかげが頂けるよ」と、信心への道をやんわりと示してくれていました。

手紙は就職してからも続き、やがてダンボール箱いっぱいになりました。



「私に金光教を信じてほしい、教えを一つでも伝えたい、という母の願いが私の中に染みこんで神様に向かう心が生まれてきたように思う

んです」と、振り返ります。

安達さんは、就職してからも教会にお参りすることはありませんでした。ところが三年ほど経ったある日のこと、車を運転していて大府教会の看板がふと目に飛び込んできた時に、この教会にお参りたいという強い気持ちが急に湧き起こってきました。

二十六歳の時、初めて一人で教会にお参りすると、教会の先生ご夫妻が優しく迎えてくれました。

安達さんは言います。「教会にお参りしたことを母はとても喜んでくれました。これは自分が出る親孝行だと、とてもありがたく思えました。また、教会にお参りすることによって世の中の見方、感じ方が変わってきました。例えば

ば、人を大切にすることが出来るようになりま

続けられたのです。

した。若い時に比べて焦らなくなつたし、社内、社外の人との人間関係も良くなつていきました。信心を通して自分が成長していくのをありありと感じました」

安達さんも引越しの翌日から毎朝七時にお参りし、仕事のことを先生にお願いしてから会社に行くようになりました。

安達さんは、二十七歳の時に教会の先生ご夫妻の仲人で結婚しました。

「先生はいつも私のお参りする時間に待つて

結婚の翌年にお父さんが亡くなり、岡山で一人暮らしとなつたお母さんに一緒に暮らして欲しいと、四年後に家を新築しました。それも、

いて下さり、どんなことでも聞いて下さいました。部下に対してモヤモヤしている気持ちや不満をお届けすることによって、仕事での道筋が頭の中で整理されていくのが分かりましたし、私の願いが神様をお願いすることによって道がついていくのをはつきりと感じました」と、話します。

「家を建てるのなら教会のそばに」と言うお母さんの願い通り、教会から歩いてわずか十分の所でした。お母さんは、住み慣れた岡山を離れて一緒に暮らす決心をしてくれました。そして、毎朝六時のお参りを雨の日も風の日も楽しみに

課長昇進を先生に報告した時のことでした。「安達さんが役員となることを神様にお願ひしています」と、言われたことがありました。

先生は、一緒にお祈りして下さい、また、世のために立ち働いて欲しいとの大きなお祈りもして下さいたのです。

ある時、安達さんの担当した新製品が量産開始直前に品質に問題があることが判明し、テストをすることになりました。電話で先生に報告して良い結果を神様に願いましたが、実際は悪い結果でした。これは神様からの、「やめておけ」というメッセージと受け取り、新製品を出荷しないことにしました。関係先が多岐に渡るため、勇気のいる決断でしたが、仲間と共に最善の善後策を検討し、取引先からも全面的な協力を得ることが出来、無事に解決出来たのでした。

全てに正直であり、人を大切にしながら、何

事にも丁寧に取り組む安達さんは、その後、先生の願い通り役員となることが出来たのです。

「これは、たくさんの人たちの働きはもちろんのこと、神様のお働きなくしてあり得ないことだ」

その日早速に教会に報告に行くと、先生は我が事のように喜んでくれました。

「今の私は自分のことを祈るばかりで、人のことを祈ることがまだまだ足りません。さらに人のことを祈り、人を大切にさせて頂きたいんです。そして人を大切にすることの会社を守っていきたい」と、笑顔で言い切る安達さん。

金光教には、「自分のことは次にして、人の助かることを先にお願いせよ。そうすると、自分のことは神が良いようにして下さい」という

教えがあります。

安達さんは、お母さんをはじめご家族、そして教会の先生の大きな祈りと願いの中で、自分のことは神様にお任せという気持ちにならせてもらいながらも、人のことを祈り続け、仕事に頑張っています。



《信者さんのおはなし》

「お母さんの言葉」

「地獄めぐり」で有名な温泉の町、大分県別府市。六十六歳の阿部信二さんは、この町で有料老人ホームなどの事業所を運営しているNP
O 法人の事務局長を務めています。

昭和二十四年、大分県宇佐市に生まれ、貧しい母子家庭に育った阿部さん。幼いころに度々聞いた、「生きていることが、神様のおかげなんだよ」というお母さんの言葉が、今も心に響いてきます。お母さんは、長唄三味線の名手で、若いころ仕事で中国大陸に渡っていました。丈夫な体ではなかったことから、そこで金光教の信心に出合い、神様におすがりしながら厳しい

時代を生き抜いてきた人です。

そんなお母さんの元に生まれた阿部さんは、生まれて程なく、死の病と恐れられていた結核を患い、結核菌が脊椎せきつひを侵す脊椎カリエスにかかりました。物心付いた時には、体を固定するギプスベッドに横たわり、トイレなどの他は、動くことを許されませんでした。

宴会で三味線を弾いたり、竹細工の内職をしたりしながら、病気の息子を女手一つで育てなければならぬ厳しい現実。それでも、お母さんは、「この子が生きていることが、神様のおかげなんだよ」と、周囲の人にも話すのでした。

阿部さんは、お母さんのこの言葉を聞く度に、「死んでしまうところを、お母さんの祈りによ

って神様に助けられたんだ」と思い、母親の深い愛情と慈しみを感じるのです。そして、背中に負われての教会参拝を重ねる中で、まるで漫画のヒーローのように、神様はいつも自分を守って下さり、生かして下さっているのだと、固く信じるようになりました。

やがて、通院のために移り住んだ別府市で、念願だった小学校に通い始めます。本当は十一歳、六年生でしたが、特別な計らいで二年遅れの四年生になりました。「友達と遊べることをうれしくて、学校はこんなに楽しい所なんだと思っただ」と、懐かしそうに振り返ります。友達と会えない休みの日は大嫌いでした。

その一方で、「一緒に食事をすると病気がうつる」というような心ない言葉を投げ掛けられ

ることもありました。お母さんは、そんな阿部さんに、「意地悪を言う人は、きつと何か心に抱えているんだよ。そのつらい気持ちを分かってくれなさい」と話してくれました。阿部さん自身は、神様に守られていると確信していたおかげで、いくら意地悪を言われても平気でしたが、それからは、「気の毒なこの人が助かればいいなあ」と、子どもながらに、相手の助かりを祈るのでした。

時は流れ、阿部さんは、東京の大学へ進みます。東京でも、金光教の教会にお参りし、教会の青年会に熱心に参加しました。

昭和五十一年、郵政省に入った阿部さんは、学生時代に教会で知り合った恵美子さんと翌年に結婚。三人の娘を授かります。やがてお母さ

んも呼び寄せて、休みの日などには、家族みんな
で教会に参拝する、幸せな日々が続いていき
ます。

仕事では、人事を担当した他、有名人を「一
日郵便局長」に起用してのPR作戦や、タレン
トに絵を描いてもらっての絵はがき制作など、
様々なアイデアを形にし、高い評価を受けまし
た。

家庭も仕事も順風満帆。そんな阿部さんに大
きな転機が訪れます。五十三歳の時のことでし
た。

いつものお薬をもらっておこうと、掛かり付
けの病院に立ち寄った阿部さんは、そこで心不
全を起こし、倒れてしまったのです。

気が付いた時には、体を動かそうにも筋肉が

固まって動けず、声も出せなかったといえます。
それもそのはず、三週間も意識を失ったままべ
ッドに横たわり、ただただ眠り続けていたので
すから。

妻の恵美子さんに支えられての入院生活は、
二カ月弱にも及びましたが、ありがたいことに、
何の後遺症もなく、職場への復帰も果たすこと
が出来たのです。

退院して家に帰った時、八十六歳のお母さん
が、ホッと安心したような笑顔で迎えてくれま
した。認知症ながらも、ずっと手を合わせて祈
ってくれていたお母さん。その安堵あんどに満ちた表
情は、「ああ、今日もこの子は生きている。生
きているのは、神様のおかげなんだよ」と、改
めてそう語り掛けてくれているようでした。

「幼いころの結核、そして心不全。またもや、無い命を神様に助けて頂いた」という思いは、やがてお母さんを看取る中で次第に強いものとなっていきました。そして、「助けられた命をどう生かし切るか」ということが、定年退職した阿部さんの大きなテーマになりました。

ちょうどそんなころ、家族の状況や経済的なことなどを始め、様々な理由で困っておられるお年寄りを、介護支援で支えようというNPO法人が設立され、お誘いが掛かったのです。声を掛けてくれたのは、NPOの代表で、別府時代の幼なじみでもある金光教青山教会の先生でした。

事務局長に就いた阿部さんは、施設の職員たちにもいつもこう話しています。「利用される方

々と私たちは、家族です。『この方々が、自分の大切なお父さんやお母さんだとしたら、どんなお世話をするだろう』と考えて接するようにして下さい。そうすれば、心の通った介護が出来るでしょう」と。

今日も阿部さんは、お年寄りの人たちが、我が家に居るように安らいで過ごすことが出来るようにと願いつつ、事務局長の仕事に当たっています。「生きているのは、神様のおかげなんだよ」と話してくれた、お母さんを思い浮かべながら。



金光教本部 ラジオ放送係

住所 〒719-0111
岡山県浅口市金光町大谷320

電話 0865-42-6453

FAX 0865-42-2114

メール w-master@konkokyo.or.jp



KONKOKYO

ニッポン放送 日曜日 あさ4時30分

東海ラジオ放送 金曜日 あさ5時25分

朝日放送 水曜日 あさ4時50分

RKB毎日放送 日曜日 あさ6時50分

ここで聴くおはなし

検索

